

平成30年 5月30日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K18833

研究課題名(和文) 湘南地方サナトリウムにみる近代メディカルツーリズムによる観光まちづくり

研究課題名(英文) A study on tourism town planning by medical tourism of modern sanatoriums in Shonan Coast

研究代表者

川田 佳子(押田佳子)(OSHIDA, Keiko)

日本大学・理工学部・准教授

研究者番号：10465271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代湘南海岸における「サナトリウム」「療養下宿」「別荘地」をサナトリウム群と捉え、そこで展開されたメディカルツーリズムの実態を明らかにすることを目的とした。その結果、近代の湘南海岸に設立された12のサナトリウムのうち特徴的なメディカルツーリズムが茅ヶ崎と鎌倉で展開されたことを捉えた。茅ヶ崎では、サナトリウム「南湖院」による徹底した衛生指導の下、比較的重篤でない患者を中心に湘南海岸、および東海道線沿線のまちにおけるメディカルツーリズムが、鎌倉では特に沿岸の地区において、藤沢から逗子に至る比較的広範囲において療養や通院と地域散策を為し得る体制が整っていたことを捉えた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we aimed to clear that medical tourism in modern Shonan coastal area. As results, it was clarified that characteristic medical tourism was developed in Chigasaki and Kamakura area. In Chigasaki, slight tuberculosis patients who received hygiene instruction from Nankoin that was called the east's best sanitarium, went around town which along Shonan coast and Tokaido rail line. In Kamakura, patients who live in villas and rooming houses were walked around the town while medical treatment and visiting hospital.

研究分野：観光まちづくり

キーワード：サナトリウム メディカルツーリズム 湘南海岸 近代 療養下宿 観光まちづくり 観光効果

1. 研究開始当初の背景

近代において結核は国民病とされ、患者を隔離・療養させる為の施設「サナトリウム」が各地に建設された。大磯から逗子に至る湘南海岸には 12 のサナトリウムに加え、通院患者が周辺に住む為の療養下宿と上流階級が保養に用いる別荘地が共に展開された。これらの建設は湘南海岸の発展に大きく寄与しただけでなく、療養者及びその関係者による観光である「メディカルツーリズム」が普及した^[1]。この近代メディカルツーリズムは、現在の我が国が観光戦略として進めているニューツーリズムを検討する上で貴重な経験であるといえる。

2. 研究の目的

以上をふまえ、本研究では、近代湘南海岸における「サナトリウム」「療養下宿」「別荘地」をサナトリウム群と捉え、そこで展開されたメディカルツーリズムを明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象

近代に存在した湘南地方サナトリウム全 12 施設うち、現在はこの全てがサナトリウムではなくなっており、一般病院が 8 施設（うち鈴木療養所のみ結核病床有り）、精神病院 1 施設、介護付き老人用マンション 2 施設、廃院が 1 施設となっている（表 1）。本研究では、これらのサナトリウムおよび近隣にあった療養下宿と別荘地を対象とする。

(2) 調査方法

本研究の調査は、近代湘南海岸サナトリウム群に係わる文献調査、および各施設の後継者や各自治体の市史編さん等に係わった郷

表 1 対象サナトリウム一覧

施設名	所在地	現況
鎌倉海浜院	鎌倉市	廃院
鎌倉養生院	鎌倉市	一般病院
杏雲堂平塚分院	平塚市	一般病院
鎌倉病院	鎌倉市	一般病院
中村恵風園療養所	鎌倉市	一般病院
南湖院	茅ヶ崎市	介護付老人用マンション
鈴木療養所	鎌倉市	一般病院（結核病床有）
額田保養院	鎌倉市	一般病院
湘南サナトリウム	逗子市	介護付老人用マンション
長谷川病院	鎌倉市	一般病院
聖テレジア七里ヶ浜療養所	鎌倉市	一般病院
林間病院	鎌倉市	精神病院

土史家へのヒアリング調査、古地図を参照しながらの現地踏査、などにより遂行した。

4. 研究成果

(1) 近代湘南サナトリウム全般における傾向

文献調査と郷土史家へのヒアリング調査より、メディカルツーリズムの実施者となりえた患者の多くは軽度の結核患者であり、多くは通院または往診による治療を受けたものであることを捉えた。このことより、近代湘南メディカルツーリズムは療養下宿や別荘を拠点に展開されたと考えられる。この点に着目し、近代湘南におけるサナトリウム全 12 施設に係わる患者の療養下宿および別荘の立地傾向を示したものを表 2 に示す。

なお、本調査において、メディカルツーリズムの展開においては、患者の健康状態と各サナトリウムが大きく関わっていることが確認された。以降は、特徴的な知見が得られた茅ヶ崎の「南湖院」およびこれに付帯する療養下宿「魚民館」と、鎌倉のサナトリウム群に付帯する別荘地、およびこれらの療養下宿として利用された有名旅館「東屋」におけるメディカルツーリズムについて述べる。

表 2 各サナトリウムに係わる療養下宿・別荘の立地傾向

施設名	主な通院・往診患者の所在
鎌倉海浜院	往診：由比ヶ浜周辺の別荘（皇族・華族・政界の重鎮が多い）
鎌倉養生院	通院：鎌倉大町周辺の下宿など 往診：大町周辺の別荘（軍人、財界人が多い）
杏雲堂平塚分院	通院：主に鎌倉大町周辺の下宿 往診：周辺の別荘
鎌倉病院	通院：主に逗子～藤沢方面の療養下宿ならびに小規模別荘 往診：周辺の別荘など（富裕層の患者に限定）
中村恵風園療養所	
鈴木療養所	
額田保養院	
長谷川病院	
聖テレジア七里ヶ浜療養所	
林間病院	通院：近隣の療養下宿、別荘。 （重度の患者は原則入院を徹底）
湘南サナトリウム	
南湖院	

(2) 「南湖院」にみるメディカルツーリズム

南湖院設立に係わる茅ヶ崎の発展

1880 年代に鉄道駅の開業、別荘地化、洋風サナトリウム建設が進行していた逗子、葉山、鎌倉、大磯とは異なり、明治 20 年代以前の茅ヶ崎、相模川河口の半農半漁の小村であった。高田畠安が 1896(明治 29)年に東京神田駿河台に設立した東洋内科医院の結核療養専門の分院開設地を郊外に求めた結果、1896

年に茅ヶ崎村字南湖 5,568 坪の土地を格安で購入し、翌年には第一病舎が着工した^{[2][3]}。この時、鎌倉や逗子でみられたサナトリウム開設への反対運動はみられず、当時の村長によって、別荘地の売り込みとほぼ同時進行で、積極的に病院の受け入れが進められた^[4]。南湖院開設に伴い、茅ヶ崎駅から南湖院までの道路の整備、駅の南乗降口開設(この際に南湖院の土地の一部を提供)など、周辺のインフラ整備が進められ、通称「病院通り」は、南湖院へ訪れる人によって、初期は人力車、終焉期にはタクシーの往来で賑わうほどとなった^[4]。これに伴い、南湖院通沿いには、当時では珍しいパンや牛乳などの滋養に良いとされた食料品店をはじめとする、様々な店舗が立ち並び、賑わいをみせた(表 3)。

表 3 南湖院門前に開店した店舗(大正 10 年頃)

業種	屋号(取り扱い商品)
旅館	茅ヶ崎館、魚民旅館、松屋、かさ屋、ほか
療養下宿 (外来療養者用)	富士見館、松香園、ほか
食料品	青木(米・麦)、定源(魚)、養生館(肉)、八百久(野菜)、カギサン(味噌、醤油)、釜成屋・富貴堂(パン)、猪俣・雲出(牛乳)、鳥辰(卵)
日用品	林屋(雑貨)
燃料	小原(石炭)

南湖院入院患者にみるメディカルツーリズムの盛衰

南湖院入院患者は、比較的症状が軽い A 患者と重篤な B 患者に分かれ、入院患者によるメディカルツーリズムは主に A 患者によって南湖院の「敷地内」「敷地外」で展開された。

全サナトリウムにおいて最大規模を誇る敷地内には、築山や池泉を設えた庭園に加え、砂浜が含まれており、海気療養がてらの散策に供する空間となっていた。また、石川啄木らが、国木田独歩が死亡した病室をわざわざ訪れていることから、南湖院自体が観光資源として認識されていたことが窺えた^[3]。敷地外では、A 患者や見舞客らが馬入川で舟に乗ったり、眼前の湘南海岸を日常的に訪れたり、当時寂れた寒村であった湘南地域において楽しんでいただことが捉えられた。

具体的には、葛西善蔵が療養者の友人と散策した様子を「二人で散歩に出て、蜜柑を食べながら近くの小川で鮒を釣っているのを見たりして」と記したり^[2]、平塚らいてうが患者である姉と馬入川で舟遊びをする様子が撮影されるなど、南湖院からほどなく近い湘南海岸を中心に展開されていたことが分かる。これは、療養者に課せられた「院内心得」

において、「海浜にて漁業等の迷惑とならないように」と注意がなされていたことから、眼前に広がる砂浜に日常的に療養者が訪れていたことが窺える。特に平塚らいてう姉妹は、高田院長と懇意であったことより、院長から直接周辺の案内も受けており、充実した茅ヶ崎観光をしていたとみられる。さらに、『南湖院と高田研安^[3]』によると、「検温巡回時間の合間に、仲間を誘って橋を渡り、対岸の平塚の喫茶店に行った」「大磯のうなぎ屋まで遠征した」など、行動範囲が茅ヶ崎に留まらないことが捉えられた。一方で、療養者は外出時に南湖院より携帯用痰壺又は痰袋の所持を義務付けられており^[2]、あくまでも医師の管理下におけるメディカルツーリズムであったといえよう。

また、南湖院拡大に伴う周辺地域の発展の影響は別荘地や宅地開発にも及んだ。これらの開発は、南湖院によって茅ヶ崎に根付いた「結核のまち」のイメージを払拭する良い機会とされ、1927(昭和 2)年の海水浴場開設、神奈川県による湘南海岸の公園化計画、1936(昭和 11)年にはこれに先立ち湘南遊歩道(現・国道 134 号線)が完成し、湘南海岸一帯の観光地化が急速に進められた^{[4][5]}。さらに近隣に建設予定であった結核療養所に対する「反対決議書」が県の都市計画課に提出され、その意向が認められたことで^[4]、観光都市への転換を目指した茅ヶ崎町が、その後のまちづくりにおいて南湖院を含む結核療養所を不要と判断したことが窺える。その後、太平洋戦争において湘南海岸一帯が軍事上の重要地とされ、1945(昭和 20)年に海軍に接收される形で南湖院は閉院し、奇しくも東洋最大のサナトリウム南湖院によって戦後の湘南サナトリウム終焉の口火が切られることとなった。

以上より、南湖院の設立は、茅ヶ崎の発展に大きく貢献しただけでなく、メディカルツーリズムを通じた観光資源の発掘へと繋がった。しかしながら、南湖院により発掘された茅ヶ崎の観光が価値を見出されたことで、南湖院の存在価値が問われることとなったプロセスを捉えた。

療養下宿「魚民館」にみるメディカルツーリズム

南湖院門前の療下宿「魚民館」は、近隣住民による貸間型の下宿であり、本館、別館、

新館、中二階の4棟で構成され、利用者間の感染を防ぐ為に本館を除く3棟が療養下宿として利用された。ヒアリング調査の結果、魚民館は南湖院の指導の下、感染対策が徹底された上に重篤な療養者を受け入れていなかったことが明らかとなった。このことより、多くは南湖院のA患者に相当するといえ、患者の多くは治療の為に散歩と称して湘南海岸や茅ヶ崎駅周辺に出かけたことが確認された。さらに、東海道線を用いて横浜方面に買い物に行く等、上述の南湖院の「敷地外」のメディカルツーリズムとほぼ同様のメディカルツーリズムが展開されていたといえる。

以上より、南湖院に付帯する療養下宿・魚民館では、南湖院の衛生指導により療養環境は良好ながらも病院の門前であるという立地が影響してか、メディカルツーリズムはあくまでも付加的な物に留まっていたことが明らかと示された。

(3) 鎌倉のサナトリウム群にみるメディカルツーリズム

鎌倉別荘地にみるメディカルツーリズム

近世以前より著名な観光地であった鎌倉は、鉄道敷設と相まって、近代湘南で最大の別荘地となった^[5]。当時の鎌倉にはサナトリウムが9軒あり、通院目的の別荘族が多かったことが確認されている。特に、鎌倉のサナトリウムは所謂高級サナトリウムであり、入院患者は富裕層に限定され、患者の多くは藤沢から逗子に至る広範囲にわたり、様々な手段で通院していた。各サナトリウムでは、当時推奨されていた海気療法に加え、鎌倉自体が中世以降、観光地であったことより、徒歩による地域観光を推奨しており、これがメディカルツーリズムとして、別荘居住の患者達を中心に広がった。さらに、別荘居住の患者の行動は個人に依るところが大きく、上述のサナトリウムや療養下宿に比べ制約が少なかったことより、比較的自由的なメディカルツーリズムが展開されていたことが関係者の手記より確認された。具体的には、療養の為に鎌倉の別荘で暮らした詩人・中原中也は八幡通り等の鎌倉の名所を日常的に訪れており、鎌倉に多く滞在した文士、とりわけ親友の小林秀雄と交流を深めながら逗子や他の地域へ赴いていたことが確認された^[6]。また、政

府要人であった陸奥宗光も療養で別荘を建てた際に他の別荘所有者と鎌倉同人会を立ち上げ、段葛に桜を植える、郵便局や電話局を誘致するなどのまちづくりに携わった^[7]。

以上より、鎌倉別荘地にみるメディカルツーリズムは、単なる観光資源の散策に留まらず、まちを活性化させる観光まちづくりにまで発展し、これが現在のまちづくりの礎となっているといえよう。

割烹旅館「東屋」にみるメディカルツーリズム

かつて藤沢市鵜沼にあった東屋は、1892(明治25)年に鵜沼別荘開発の祖と言われた伊東将行によって創業された割烹旅館である。1939(昭和14)年に経営難で店を畳むまで50年弱という短い歴史にも関わらず、今もなおその名前が語り継がれる理由として、作家・斎藤緑雨が療養滞在中に果たした役割は大きい。緑雨によって東屋は、文壇の著名人が集うサロンと化しただけでなく、近隣の別荘地との係わりを深めるための一大交流拠点へとなった。そこで、本項では、旅館東屋の療養下宿としての姿に着目し、緑雨の手記『鵜沼日記』より明らかにした。

その結果、緑雨が東屋に滞在した172日間は、サナトリウムに比べて自由度が高いことに加え、有名旅館ならではの美しい眺望と空間快適性を得られることから、良質な療養下宿であったことが窺える。また、文筆業を生業とする緑雨にとって敷地内の郵便局の存在は滞在を決定する最重要事項であったとされ、転地療養者が外部との繋がりを持つことが滞在中および療養における活力となったことが裏付けられた^[8]。以降、緑雨が残した日記『鵜沼日記』における敷地内、施設外の行動記録より、東屋が藤沢のメディカルツーリズムに果たした役割について述べる。

敷地内の行動記録の大半は広大な池水を配した日本庭園内のものであり、散策や簡単な運動の場となっていたことが窺えた。志賀直哉が1912(明治45)年に家族旅行で東屋を訪れた際に記した『鵜沼行』によると、この庭園の池で妹達と舟に乗ったとあり、東屋の敷地内空間が療養者と観光客の区別なく利用されていたことが分かった。上記の行動以外で敷地内の記述として多くみられたのが、東屋からの眺望についてであり、「廿六日 晴ヶサ八富士ノ雪増ヌ(略)」のように、富士山

の様子が特に多く記された^[8]。次いで江の島の記述が多くみられたが、後述の敷地外行動で記す通り、実際に一度訪れているもののそれほど魅力を感じなかったとあることより、江の島はあくまでも中・遠景要素の一つとして楽しむにとどめられたことがわかる。なお、東屋内における療養の記録は入浴に関するもののみであった。

敷地外の行動記録は71件みられ、浜(主に鵜沼海岸)へ訪れたものが24件と最多であった。緑雨の浜での行動には、「逗子から大磯に至る湘南海岸一帯を眺めながら散策した」とあり、これは、当時の結核治療で有効と考えられていた海気療法(海浜の清浄な空気を用いた治療方法)の一環でなされていたといえる。この他にも、小田原や国府津、東京に訪れた記録があるが、小田原以外の地については行楽で1度訪れる程度であった。また、東京のように通院目的のものが7件見られた。以上より、緑雨の施設外での行動は東屋を拠点に東西へ広く展開されているものの、療養に関するものが多くみられた。これは、東屋が近代湘南メディカルツーリズムにおける有効な滞在拠点として機能したことを裏付けるといえるであろう。

<引用文献>

- [1] 高三啓輔：「サナトリウムの残影・結核の百年と日本人」、日本評論社、p18、2004
- [2] 大島英夫：「南湖院・高田畊安と湘南のサナトリウム」、茅ヶ崎市史編集委員会、2003
- [3] 川原利也：「南湖院と高田畊安」、中央公論美術出版、5-91、1997
- [4] 茅ヶ崎市：「茅ヶ崎市史 第2巻、資料編(下)」、茅ヶ崎市史編集委員会、1978
- [5] 安島博文・十代田朗：「日本別荘史ノート」、住まいの図書館出版局、33-198、1991
- [6] 大岡昇平ほか4名：「新編中原中也全集」、角川書店、2003
- [7] 鎌倉同人会、「鎌倉同人会100年史」、冬花社、12-105、2015
- [8] 斎藤賢、「斎藤緑雨全集」、巻八、115-278、筑摩書房、2000

5. 主な発表論文等

[学会発表](計4件)

押田佳子、安齋七風：湘南サナトリウムにおける近代メディカルツーリズムに関する研究(その3)南湖院門前の療養下宿「魚民館」着目して、第61回日本大学理工学部学術講演会、2017
安齋七風、押田佳子、倉津耕大：湘南サナトリウムにおける近代メディカルツーリ

ズムに関する研究(その4)斎藤緑雨を通して見た割烹旅館「東屋」の療養下宿としての姿、第61回日本大学理工学部学術講演会、2017

押田佳子、横内憲久、岡田智秀、安齋七風：湘南サナトリウムにおける近代メディカルツーリズムに関する研究(その1)南湖院設立に伴う茅ヶ崎の発展に着目して、第60回日本大学理工学部学術講演会、2016

安齋七風、横内憲久、岡田智秀、押田佳子：湘南サナトリウムにおける近代メディカルツーリズムに関する研究(その2)「南湖院」療養者手記より捉えたレクリエーションおよびメディカルツーリズムの実態、第60回日本大学理工学部学術講演会、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

押田 佳子 (OSHIDA, Keiko)
日本大学・理工学部・准教授
研究者番号：10465271